2023.3.31　No.9

CESCHI NEWS LETTER

京都大学大学院文学研究科附属　文化遺産学・人文知連携センター　ニュースレター

KUDH Basics: 文献管理ソフトウェア・ワークショップ

人文知連携拠点では、2021 年度の京都大学文学研究科・文学部公開シンポジウムにおいて、人文学とコンピューティングとの接合や協働を展望する「デジタル人文学」について議論する場を設けました。デジタルツールの利用が研究者の基本的リテラシーとなりつつある昨今において、このシンポジウムは、「デジタル人文学」の課題とそれに向けて求められる教育について考える機会となりました。そのため、今年度から初学者でもデジタルツールを実践できるようになることを目的に、「Kyoto University Digitization Hub of the Humanities, Social and Cognitive Sciences (KUDH) Basics」と題したワークショップシリーズを始動し、第 1 弾として夏に LaTeX 講座を開催したほか、専門家向けに京都大学デジタル人文学国際会議 KUDH2021 ”Digital Transformation in the Humanities”も開催しました。

そして、この度、2 月 17 日と 21 日に KUDH Basics ワークショップの第 2 弾である文献管理ソフトウェア・ワークショップを開催する運びとなりました。2 月 17 日は学内限定で、京都大学附属図書館のスタッフによる、文献管理ソフトとオープンサイエンスへの入門講座が、2 月 21 日には、学外の方も参加可能な、人文知連携拠点のスタッフによる、近年人気が高まっている文献管理ソフト Zotero の使い方のレクチャーが行われました。

1 日目の 2 月 17 日は、京都大学附属図書館の教職員の皆様による、「論文検索・文献管理ツール・オープンサイエンスの基礎」が開催されました。この日は始めに、図書館職員の八木澤ちひろさんが、現在の図

書館サービスについて紹介しました。京大図書館は、Google Chrome、Firefox を対象に京大専用プラグインを配布しています。これを有効にすると、京大が契約している電子ジャーナルをよめるなどのメリットがあります。その後、図書館がすでに用意した録画教材で、日本を代表する論文検索サイトの CiNii Articles の紹介、および基本的な解説がなされました。なお、CiNii Articles は、2022 年 4 月 1 日を持って、サービスが終了し、現在は CiNii Research がサービスを受け継いでいます。

これに続き、同様に録画教材を用いて、現在京都大学が契約し、構成員は無料で用いることができる、EndNote Basic の基本的な使い方について説明がなされました。EndNote は、文献管理ツールとして伝統があり、幅広い分野で使用されてきたものです。この録画教材では、文献の登録の仕方、Word などでのプラグインによる引用の仕方、参照文献一覧の自動生成など、EndNote Basic の基本的な機能について説明がなされました。

最後に、京都大学附属図書館の西岡千文助教（当時）により、「オープンサイエンスの動向について」という題で、オープンサイエンスの最新動向が教授

されました。西岡千文氏は、オープンサイエンス学でキール大学から博士号を授与された、日本におけるオープンサイエンス学で活躍されている学者です。オープンサイエンスとは、学術成果である論文やデータを誰でもアクセス可能に公開しようとする運動を指します。

まず、オープンサイエンスの前段階となる論文のオープンアクセスに関して基本的な説明、オープンアクセスの世界的運動の始点となった Budapest Open Access Initiative (BOAI)、 ゴールド OA、グリーン OA、ダイアモンド OA などのオープンアクセスの種類の解説、ハゲタカジャーナルに関する注意喚起などが行われました。その後、京都大学の KURENAI などの機関レポジトリの解説、京都大学研究データ管理・公開ポリシーについて解説がなされ、最後にオープンアクセスからオープンサイエンスへレベルアップするための課題、つまり、オープンアクセス以外の必要条件や、FAIR 原則（findable、accessible、interoperable、re-usable)、研究データ管理計画、研究データのサイクルについて議論がなされました。

なお、西岡助教による 2 月 17 日のオープンサイエンス入門のパートは、京都大学のリポジトリ KURENAI において公開されています。

2 日目は 2 月 21 日に開催されました。2 日目のテーマは、現在急速にシェアを伸ばしている無料の文献管理ソフトである Zotero 入門で、人文知連携拠点の宮川創助教によって行われました。Zotrero は現在、世界中の研究者や研究機関が用いている文献管理ソフトウェアで、商用ではなく、ジョージ・メイソン大学のロイ・ローゼンツヴァイク歴史・ニューメディアセンターが開発したものです。このソフトは、EndNote Basic と同様、研究で用いる文献の管理、引用や参照文献表の作成を容易にし、Microsoft Word でもアドオンを用いて連携できます。このような文献管理ソフトは、EndNote、RefWorks、Mendeley、PaperPile、Zotero などが知られていますが、Zotero はその中でも、無料で使え、かつ、様々な形式で出力し、さらに、グループやコミュニティでの文献の書誌情報の共有が非常に簡単にできることで、現在人気が世界中ででている文献管理ソフトです。Zotero は、アルバニア語の「マスターする」と言う意味の動詞に由来しています。

本講義では、Zotero のダウンロードおよびインストールの仕方（Mac、Windows、Linux)、CiNii Articles、Semantic Scholars、WorldCat、Google Scholar などからの文献情報の Zotero へのインポートの仕方、そして、Word での引用および参照文献表の自動生成、LaTeX で使用するための BibTeX ファイルの出力について学びました。

本講座は、後日再編集したのちに、京都大学大学院文学研究科・文学部人文知連携拠点成果公開 WEB のウェブサイトにて公開されます

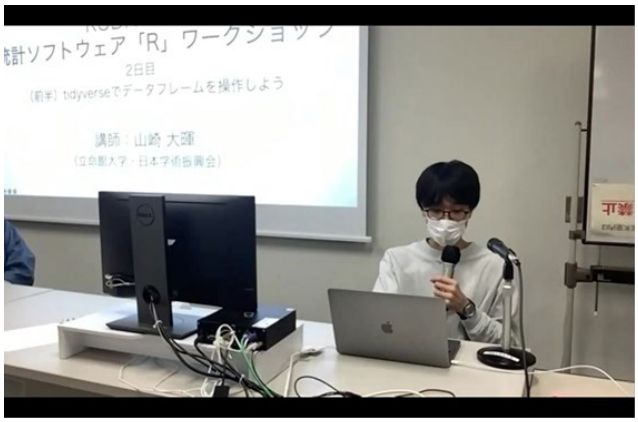
KUDH Basics: 統計分析ソフトウェア「R」・ワークショップ

2022 年 9 月 21 日（水）から 22 日（木）にかけて、人文知連携拠点の主催により、統計分析ソフトウェア「R」の使い方を学ぶワークショップを開催しました。人文知連携拠点では、人文学・社会科学分野の連携のきっかけのひとつとして分野横断的にデジタル的手法を学ぶ機会を提供してきました。その取り組みの一つとして、初学者でもデジタルツールを実践できるようになることを目的に、「Kyoto University Digitization Hub of the Humanities, Social and Cognitive Sciences (KUDH) Basics」と題したワークショップシリーズを 2021 年より始動しました。初年度にはシリーズ第 1 弾として組版ソフトウェア「LaTeX」講座、第 2 弾として文献管理ソフトウェア・ワークショップ、第 3 弾として人文学資料のデジタル化に役立つ TEI（Text Encoding Initiative）ワークショップを開催したほか、専門家向けに京都大学デジタル人文学国際会議 KUDH2021 ”Digital Transformation in the Humanities”も開催しました。2 年目となる今年度は、KUDH Basics ワークショップの第 4 弾として、2 日間のワークショップを、オンサイトとオンラインのハイブリッド形式で開催する運びとなりました。

今回のワークショップでは、データ分析を効率的に行うことができるフリーソフトウェア「R」の使い方について、2 名の先生方に解説していただきました。授業動画は人文知連携拠点の Web サイトに公開されています（https://www.ceschi.bun.kyoto-u.ac.jp/kyoten/）。ワークショップは 2 日共に午前（10:30-12:00）・午後（13:15-14:45）の 2 部に分かれて行われました。オンサイトでは文学部校舎 3 階情報端末室で実施し、オンライン参加者向けに Zoom ミーティングにて中継を行いました。今回のワークショップでは演習が大半を占めることを鑑みて、2 名の先生方のうち一方がメイン講師として全体の進行を管理し、もう一方の先生がサブ講師として授業中の個別の質問に対応されました。また、拠点の教員 2 名もサブ講師に加わり、万全のフォローアップ体制でワークショップに臨みました。

1 日目は導入編として、北陸先端科学技術大学院大学で日本学術振興会特別研究員として活躍する山本寛樹先生をお招きし、R のインストールと基礎的な操作方法について、実演形式で解説と演習を行いました。1 日目午前の部では、山本先生の説明を受けながら、参加者が各自のパソコンに、R とそのグラフィカル・インターフェースである「R Studio」をインストールしました。インストール作業終了後は、R 言語の基礎的な文法の解説と共に、分析結果をドキュメントファイルとして保存できる「R Markdown」機能のレクチャーを行いました。午後の部では、「データの可視化」をテーマに、作図に特化した拡張機能である「ggplot2」パッケージの使い方を解説しました。

2 日目は応用編として、立命館大学総合心理学部で日本学術振興会特別研究員として活躍する山﨑大暉先生をお招きし、高度なデータ操作や作図技法について解説と演習を行いました。2 日目午前の部では、効率的なデータ分析に欠かせないパッケージ群を一つにまとめた「tidyverse」パッケージを用いて、R 独自のデータ型である「データフレーム」を自在に操作する方法を解説しました。例えば、データフレーム内



のグループごとに、要約統計量を瞬時に算出する方法などを実演していただきました。午後の部では、1日目に導入した「ggplot2」の使い方を掘り下げ、グラフの見た目をよりわかりやすく且つ美しく整えるテクニックを解説していただきました。

各日3時間、2日間に及ぶワークショップには、オンサイト・オンライン合わせて、学内外から学部生や大学院生、大学教員など、約 40 名が参加しました。参加者の多くは人文学や社会科学を専攻する文系の学生で、申込時のアンケートから、Rの使い方を基礎から網羅的に学びたいという需要が大きいことがわかりました。こうしたニーズを受けて、当初の授業計画を一部変更し、より基礎部分に重点を置いたワークショップを意識しました。受講後アンケートによれば、基礎的な内容については充実度・理解度共に高評価でしたが、一方で、統計解析など、より高度なデータ分析の習得を望む声も大きいことがわかりました。今回の内容を踏まえて、より高度な解析をRで行うワークショップの開催を現在検討しています。

今回のワークショップが、参加者にとって、研究活動におけるデータ分析技術向上の一助になれば幸いです。人文知連携拠点では、今後もデジタルツールを用いた研究手法・データ管理について入門的なワークショップを開催していきたいと考えています。なお、本ワークショップは若手重点戦略に関連する活動です。

センター開催行事日誌（2022年4月～9月）

■2022月6月19日（日）
（京大文化遺産調査活用部門）

「京都大学アカデミックデイ2022（6月19日(日)、ロームシアター京都）」に、「埋もれた古道から探る地域の歴史」を出展しました。

■2022年7月2日（土）（内陸アジア学推進部門）

第 18 回近代中央ユーラシア比較法制度史研究会を開催しました。

■2022年7月16日（土）（内陸アジア学推進部門）

第87回羽田記念館定例講演会を開催しました。

■2022年7月２２日（金）（人文知連携拠点）

人文知連携共同研究会　第１３回東アジア「間文化」研究会を開催しました。

■尊攘堂の利用（京大文化遺産調査活用部門）

2022年5月１９日・６月２日
博物館実習（文化史）

■高等学校での特別講義
（京大文化遺産調査活用部門）

雲雀丘学園高等学校（6月25日）
https://www.ceschi.bun.kyoto-u.ac.jp/arcKU/topix39.html
滋賀県立膳所高等学校（９月２日）
https://www.ceschi.bun.kyoto-u.ac.jp/arcKU/topix40.html

■『京都大學藏苗圖五種』が刊行されました

人文知連携共同研究会の１つである東アジア「間文化」研究会の成果として、2022年２月、商務印書館より『京都大學藏苗圖五種』が刊行されました。
https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/news/20220822/

京都大学大学院文学研究科附属　文化遺産学・人文知連携センター
〒606－8501　京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科
URL：http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top_page/